



## 心に残る乳がん患者

### 医療法人パリアン理事長 川越 厚

50歳代前半の乳がん患者、幸子さん(仮名)。右乳房の異常を隠し続け、医師の診断を受けた段階では治す治療法がなかった。僕は間接的に幸子さんのことを聞いてはいたが、彼女はホスピスに特別な思いを持ち、憧れの(?)有名なホスピスへ入院したと聞いた後は、彼女のことはすっかり忘れていた。もちろん、彼女と会ったことはなかった。



それから数ヵ月後の土曜日、幸子さんのご主人からクリニックへ突然の電話があり、戸惑った声で「妻が『どうしても家に帰る』と言い張って困っています。明朝家に連れて帰るので、なんとか助けてください」との依頼があった。彼の依頼を断る格別な理由もなかったので、僕はお引き受けすることにした。

夫の言葉通り、翌朝彼女はホスピスの医師に付き添われ、病院車に乗って退院してきた。付き添った医師というのは僕も個人的に親しく、患者に大変優しい人であった。それはさておき、その彼が日曜日の早朝、はるばる遠くのホスピスから彼女の自宅までエスコートしたと聞き、僕はとても驚くとともに、ますます彼に対する尊敬を深めた次第である。

ところが、望み通り自宅に帰ったといっても彼女の表情は妙に硬く、直観的に僕はご主人との間になにかあるな、と感知した。娘さんの話によると二人は恋愛結婚で、病気をするまでは、娘さんも全く間に入り込めないくらいのラブラブだったとのこと。ぴんときた僕はある考えを持って、彼女の乳房を診察することにした。そのことを告げると、ご主人が案の定、すーッと部屋を出て行った。



乳がん部分は乳房の原型を全くとどめておらず、深い潰瘍を形成し、しかも独特の臭いにおいがしていた。

「長旅、大変でしたね。疲れたでしょう?でも、先生が一緒だったから安心でしたよね。」

彼女は、返事をしなかった。よほど、ホスピスに対して抱いていたイメージと現実とが違っていたのかもしれない。僕は、勝手に解釈した。

「傷の手当ては、ホスピスの看護婦さんがしたのですね。ご主人はあなたの傷を見ていないのですか?」

「はい。」

彼女はそれ以上答えなかった。

「すこし寒いから、ご主人に手伝ってもらいましょう。」

(2ページへ)



(1ページから)

「後ろからタオルをかけてもらっていいですよ。」  
 彼女は少し間を置き、首を縦に振った。  
 娘さんの招きで、ご主人が部屋に入って来た。用事をお願い  
 すると、彼は幸子さんの背後から肩に手をまわし、バスタオル  
 をそっとかけた。傷の一部が見えたのか、彼は非常に驚いた  
 表情を一瞬浮かべた。「幸子、大変だったね」という声を  
 残し、彼は部屋を出て行った。

この時から、ご主人が積極的に傷の手当てを手伝うようになった。初めのうちこそ彼女は嫌  
 がるような素振りを見せたが、ご主人がそれを全く意に介さないかの如く、ガーゼを取り換え  
 たり消毒したりするのを手伝うようになり、彼女の表情は一変した。

初めてお会いした時のあの硬い表情はすっかり失せ、穏やかな笑みを浮かべながらご主人に甘  
 えるような素振りを見せるようになった。そしてご主人も、今まで理解していなかった妻の辛  
 さを知ったためであろうか、ますます彼女のためにかいがいしく看病するようになり、二人の  
 間の溝はあっという間に埋まった。

ご主人に看とられ、彼女が安らかに逝ったのは帰宅してちょうど2週間目の早朝のことだっ  
 た。

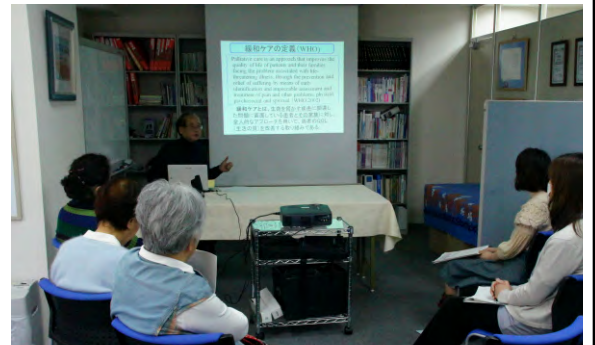
## 12年度ボランティア講座、2月2日に開催する

**受講生5名 在宅ホスピスケアの思想などを川越理事長が講義**

2012年度のボランティアを養成する講座が2  
 月2日(土)、パリアン4階で開催された。

ボランティア講座に受講されたのは、応募された5  
 名の方と4月からボランティア活動を実践している  
 2名の計7名。

ボランティア研修は、午前10時から川越理事長が  
 パリアン創設の歩み、ホスピスケアと緩和ケアの概  
 念、全人的痛みについて、在宅緩和ケアとは、などを  
 2時間講義され、受講者は真剣に聞き入っていた。



川越理事長の講義を真剣に聞き入っ  
 ている受講者

## ボランティアリーダー全員が各々のグループ活動を熱心に説明

午後は、ボランティアチームとしてのボランティアの位置づけと心構え、活動目的など、ボ  
 ランティアグループパリアンの概要を説明した。その後のボランティア活動の紹介では、各リ  
 ーダーが全員出席して、各々のグループ活動内容と活動状況を熱っぽく説明した。その甲斐あ  
 ったのか、研修終了後に3名の方がボランティア登録をして下さった。4月のボランティアの  
 集いには新人として、顔をみせて下さるに違いない。

## 「患者の目から見たパリアン」

平日の事務ボランティアとしてパリアンにお邪魔するようになってから、早1年以上。もともと患者としてパリアンに通院し始め、途中からはボランティアとしても関わっている、2つの立場を持つ私が見聞したパリアンの舞台裏を、今日はお伝えしてみます。

たとえば、パリアンでは1週間のうち各種ミーティングが開かれています。ボランティアの私は、これらに参加することはないのですが、たまたまその声が断片的に聞こえることがあります。勿論、患者さん名は伏せられ、番号管理の上でやり取りがされているので、患者さんの個人情報が増えることはありません。が、同じフロアで真剣な話し合いが行われているのは肌で感じるところです。

### ◆ ある日のミーティングでの会話

ナースの「担当する患者さんが、『〇〇の具合が良くない、体調不振』と訴えています」との報告に、院長先生が「確かに不調を訴えているのだろうけれど、果たしてそれだけだろうか？」と問いかける声が、たまたま私の耳にも届きました。一瞬その場は静まり返り、院長先生の声が続いて聞こえてきました。「患者さんが体の不調を訴える時、言葉



の裏にあるものを我々は汲み取らなければ」「もしかすると、体の不調に託して、我々パリアンのケアに不満を訴えていることだって考えられるのではないか？」と言うのです。確かに「正面切って不満を述べるまでではないけれど、どこかしっくりこない」と感じる場合もあるのかもしれませんが。そんな時、目先の体調不良を糸口に「もっと気持ちを汲み取る会話をしてほしい」という患者さんの願いもあり得ることと思いました。パリアンではナースの皆さんが患者さんのちょっとした一言を真剣に受け止めるのみならず、その裏にある真意を読み解くためのアドバイスが、経験豊富な院長先生からもたらされているようです。この日偶然私が耳にした会話は、ナースの皆さんがより「真摯に」ケアに当たる習慣を育てている一例のように感じました。

### ◆ ある日の看護部長の一言

「患者さんファーストだって、いつも言ってるでしょう。今日のナースの動きはちっとも患者さんを優先していませんよ」。この日は確か、いつも朝一番にナースから注射を打ってもらう患者さんへの対応が、直前に行われたミーティングの影響で遅れた時の、看護部長からの一言でした。

かと思えば「(患者さんの症状によっては) 退院後、自宅に着く時間丁度にパリアンのスタッフが待ち構えているなんて無神経ですよ。退院後すぐに医療処置が必要な場合もあれば、自宅に戻った患者さんが落ち着くまでの時間を見計らって、訪問すべき場合だってあるでしょう」。これも、経験豊富な看護部長ならではの一言に聞こえました。ただ正確に患者さんのケアをこなすだけでなく、一人一人の患者さんの状況、ご家族のお気持ちまでも配慮した一言と感じられます。ともするとベル

トコンベアに載せられ機械的に「処理」されるような大病院での対応に、疑問を感じた経験のある私には、きめ細かな対応こそパリアンの持ち味、と改めて認識させられた一言でした。ひよんなことから、患者でもあり、一見スタッフのようでもある立場で、パリアンに関わっている私ですが、つくづくここにたどりつけた幸運を感じます。そして、これからも少しでも恩返しできる貢献ができればよいな、と思いつつ、パリアンに通っています。(y・s)





**“公開定例カンファレンス” 紙上報告****「独り暮らし末期がん患者の暮らしを支える」  
～定期巡回・随時対応型訪問介護と看護との連携～**

パリアン主催の公開定例カンファレンスが2月20日(水)、シュタム両国ビル4階のパリアンカンファレンスルームで、介護職・看護師・医師・ボランティア・医学生・パリアンで研修中の看護師さんら約30人が参加して開催された。

開催に先立ち川越厚理事長の下記のあいさつがあった。

「昨年の診療報酬の改定の中で、24時間対応する介護サービスが点数化された。独居や認知介護などの介護力が期待できない方をどうやって在宅で支えるかという大きな課題に取り組むことができるようになった。特にがん末期の方は、24時間ケアが欠かせないが、医療だけではできないことがあるので、介護との協力・連携が大事である。このことを今日学んでいただきたい。」

本日のテーマ「独り暮らし末期がん患者の暮らしを支える～定期巡回・随時対応型訪問介護と看護との連携～」、発表者は訪問看護パリアンの佐藤いずみ看護師。

**緊急コール177回、介護と看護の連携で患者を支えた****【今回の症例及び実践内容】**

大腸がん末期の60才代の独居の女性で、“再入院はしたくない、このまま家で最期を迎えたい、痛みをとってほしい”という思いをもっていたが、家族は近くにいるが日常的な介護は困難なので、“福祉サービスと医療サービスで支えてほしい”との要望があった。

入院時から痛みがとれないことなどで強い不安をもっており、ケアニーズが高いと予想されたので、定期巡回・随時対応型訪問介護と連携し、在宅ホスピスケアを開始した。

**定期巡回・随時対応型訪問介護・看護とは：**中重度者の在宅生活を支えるため、日中・夜間を通じて、1日複数回の定期訪問と随時対応を介護と看護が一体的に、または綿密に連携しながら提供するサービス。平成24年4月から開始された。

在宅ホスピスケア開始当初から腹痛があり、医師が週1回、ヘルパーが毎日朝・夕2回、看護師が週3回入ったが、途中からヘルパーが夜を追加し毎日3回、その後痛みが増強するなどの症状が悪化し、コールが頻繁に発せられ日が続いたため、看護師も毎日1回の訪問となった。最期は痛みが軽減され、眠る時間が増えて、緊急コールも少なくなり、58日間の在宅ホスピスケアが終了となった。

患者からの緊急コールの1次対応は、介護ステーションのコールセンターで受け付け、看護が必要なときはパリアンの訪問看護師に連絡する体制をとっていた。

介護と看護の連携は、患者宅に置いた連絡ノートや電話、ファックスを使って、訪問、情報の共有化を図った。



カンファレンス風景

## 緊急コールとその対応

緊急コール回数と内容		緊急コールの対応	
コール数	177回	訪問看護師へ対応依頼	30回
痛みなどの症状	120回	訪問看護師の緊急訪問	18回
薬がないなどの不安	51回	コールセンターでの電話対応	126回
その他	6回	ヘルパーの随時訪問	3回

## 【フリートキングで出た意見】

- ・緊急コールがペンダント型だったので、持ち運びが簡易で、ベッド以外の場所でも使用できるので、転倒防止など患者本人に安心感を与えた。
- ・緊急コールの内容が医療面が多く、介護側での対応は負担が多く、症状コントロールなど訪問看護との協働が必須だった。
- ・終末期の状態変化に訪問中のヘルパーから訪問看護師へのコールが目立ち、介護チームへのデスエデュケーションの必要性を感じた
- ・家に帰ってからも痛みのコントロールができたことで、最期は痛みが取れて穏やかな顔をされていた。そして緊急コールが激減した。在宅では「痛みを取る」ことがまず大事なことだと思う。
- ・病院のスタッフは在宅医療の現場に出たことがないため、本人が帰りたと言っているにもかかわらず、帰ったら悲惨な状況になるだろうと考え、病院にいたほうがマシだと考える。こういう状況を変えていくためにも、在宅医、訪問看護師、介護職などとチームを組んで在宅医療の連携を深め、24時間安心して家にいられるようなシステムを作り、“在宅のほうがいい”と病院のスタッフにも思えるような体制を作っていくのが、これからの大きな仕事だろうと思う。

独り暮らしの末期がん患者の症例は、今後稀有な症例ではなくなるだろう。近い将来を見据えた医師、看護、介護の連携をテーマにした今回のカンファレンスは、タイムリーであったと思う。終末期における患者の不安の増大と疼痛緩和の関係については、今後の課題としておくことにする。

## 訪問ボランティア



あんなことこんなこと

## ～ 笑 顔 ～

A夫さんは、私が行くといつも笑顔で迎えてくれる。人見知りで、あまりおしゃべりではない。A夫さんのご家族はいつも一緒にいて、訪問する私を待っている。

“A夫さん、すてきな洋服ですね” “お似合いですね” と声をかけるとうれしそう。娘さんが言うには、私が訪問する日はA夫さんは何を着るかあれこれ考えるらしい。

だんだん病気が進み、シャワー浴の手伝いをするようになると“こんな姿をみられて…” と言って、淋しそうに恥ずかしそうに笑っていた。

A夫さんのうれしそうなお顔、恥ずかしそうなお顔、どちらも私の大切な思い出。

K♡



## デス・カンファレンス、事例検討会の開催予定日

今月の開催予定日

デスカンファレンス：3月29日（金）17時～18時

事例検討会：3月22日（金）17時～18時



## 「ボランティアの集い」と「講演会」を開催します

**開催日：4月20日（土）**

**会場：KFCルーム108（大江戸線両国駅A1出口直結ビルの10階）**

### 伝言板

**第1部（開始10時～） 2013年度第1回「ボランティアの集い」**

新年度の活動方針や活動計画を決め、ボランティア登録などの作業もありますので、ボランティアは出来る限り参加してください。

**第2部（開始10時30分～12時） 講演会「自分らしい最期を迎えるために」**

講演：中島一光先生

（クリニック川越副院長、元国立長寿医療研究センター呼吸器内科部長・緩和ケア診療部長）

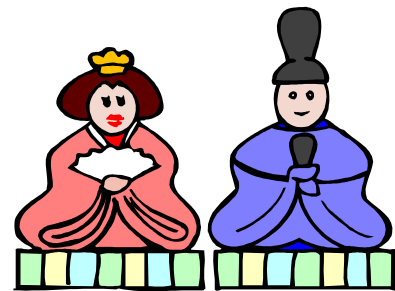
対談 川越厚先生・中島一光先生

※ボランティアは引き続き参加してください。ボランティア以外の方も参加できます。

ボランティアの集い、講演会に参加希望の方は、パリアンボランティアコーディネーター（メール：volunteer@pallium.co.jp、FAX：03-5669-8310）へお申込みください。講演会は席に限りがあるため、ボランティアの集い参加者優先・先着順とさせていただきます。

## 3月のボランティア活動予定

- ・メモルの集い：3月2日（土）午後1時30分～午後3時30分
- ・訪問ボランティア：3月8日（金）午後2時30分～
- ・デイホスピスボランティア：3月1日、8日、22日、29日
- ・手作りボランティア：3月26日（火）午後1時～3時
- ・事務ボランティア：3月16日（土）午後1時～



### 事務ボランティアの四方山ばなし

3月を迎えましたがまだまだ寒い日が続きます。

さて、この冬は、東京でも大雪が降りました。大雪の日、私は出張で地方にいたのですが、新幹線が雪で止まってしまい、止むを得ず一泊することになりました。やっとの思いで宿を見つけ、「さあゆっくり休もう」と思ったのですが、想定外の出来事で気持ちが高ぶっていたせいでしょうか、ほとんど寝ることができずに朝を迎えてしまいました。朝一番の新幹線で帰宅し、自宅のソファに横になり、次に気付いた時にはあたりは真っ暗でした。随分と長い時間寝てしまったようです。自宅という空間が、どんなに心地よい空間であるかを肌で感じる出来事でした。



さて、病院やホスピスで療養されている末期の患者さんの中には、可能であれば自宅で療養した

いと考えられる方が多いかと思えます。誰にとっても自宅での生活は何物にも代え難い心安らぐものです。パリアンのある墨田区周辺では、安心して在宅でのホスピスケアを受けることができます。しかし、その他の地域では、まだこのような体制ができていない所もあります。このパリアン通信が、全国の方々の目に止まり、ここでの取り組みやボランティアの役割を知っていただく一助になれば幸いです。

2月の事務ボランティアミーティングでは、新年度を迎えるにあたり、事務ボランティアの今後の方針を話し合いました。

新年度から、「パリアン通信の記事構成を見直してはどうか」という意見が出ました。3月のミーティングでは、新しい案を事務ボランティアメンバーが持ち寄る予定です。

皆様も、「こんな事取材してほしい」「こんな事を知りたい」というご要望がございましたら是非お聞かせ下さい。（N. K）